令和５年３月２日

「今、いのちとは何かを考える」

NVN　山口裕光

1、いのち（生と死）の捉え方

① 死と死の間の一瞬の泡沫の如くのいのち。「よどみに浮かぶ泡沫は、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」（方丈記）

② 死は生の最期。死後はなく、この世だけのいのち。

③ 死後を認めるが、人間界の姿のままで存続。

④ 六道輪廻。過現未に渡って輪廻、転生を繰り返す。バラモン教。「法華経已然等の大小乗の経宗は自身の得道猶かなひがたし」（開目抄　昭定 p590）

⑤ 出離生死。即身成仏、久遠のいのちの境地。

2、法華経・日蓮聖人のいのち

① 諸行無常を示しながら久遠を顕す。久遠の表現：「我れ実に成仏してよりこのかた、無量百千万億那由陀劫なり」（如来壽量品）。無常の表現：「現有滅不滅」（同）。
日蓮聖人の無常の表現：「人の命は無常なり。出ずる息入る息を待つことなし」（妙法尼御前御返事　昭定 p1535）。

② 法華経信仰者は釈尊の愛子。故に久遠のいのちを頂く。「今この三界は皆これ我が有なり。その中の衆生は悉くこれ吾が子なり」（譬喩品）。「此土の我等衆生は五百塵点劫よりこのかた、教主釈尊の愛子なり」（法華取要抄　昭定ｐ812）。

※「川の流れは絶えずして（久遠のいのち）、しかももとの水には非ず（諸行無常）」。
絶えることのない久遠のいのちながら、一つ一つの命は常に変化を示す。

3、いのちの本体

無常であり可視的な身体を支配する、不可視的な心、意、識、真如等があり、これを霊とか魂と呼ばれる。その本体こそ仏種であり、教法に約して言えば妙法五字。仏性は「今度、心田に仏種をうえたる」（撰時抄　昭定ｐ1052）の如く、心の田んぼであり、そこに植える種こそ仏種。また仏種には性種と乗種とがあり、性種は仏性的なもの。乗種は教法であり、お題目、妙法五字。

4、いのちについての日蓮聖人の説示

① 宝、財：「一身第一の珍宝」（可延定業御書　ｐ862）、「一切の財の中に第一の財なり」（事理供養御書　ｐ1261）

② 灯：「米は油の如く、命は灯の如し」（曾谷殿御返事　ｐ1654）

③ 限りあるもの：「命は限りある事也」（法華証明抄　ｐ1912）

④ 命の食物は法華経：「法華経は～食するによりて寿命を持つ」（曾谷殿御返事　ｐ1656）

⑤ 祈りにより延命：「四箇年の寿命をのべたり」（可延定業御書　ｐ862）

⑥ 受け難い命：「なによりも受け難き人身」（慈覚大師事　ｐ1741）